

夜は月、昼は日も

奨励	入 治彦 [いり・はるひこ]
奨励者紹介	日本キリスト教団京都教会牧師 京都刑務所教誨師

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。
わたしの助けはどこから来るのか。
わたしの助けは来る
天地を造られた主のもとから。

どうか、主があなたを助けて
足がよろめかないようにし
まどろむことなく見守ってくださいるように。
見よ、イスラエルを見守る方は
まどろむことなく、眠ることもない。
主はあなたを見守る方
あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。
昼、太陽はあなたを撃つことがなく
夜、月もあなたを撃つことがない。

主がすべての災いを遠ざけて
あなたを見守り
あなたの魂を見守ってくださいるように。
あなたの出で立つのも帰るのも
主が見守ってくださいるように。
今も、そしてとこしえに。

(詩編 121章1―8節)

旅

昔から人生は、よく旅にたとえられてきました。山あり、谷ありの日々で、皆さんもいろいろな旅をしてこられたと思います。旅というのは、日常の惰性的な生活のなかに、閉ざされた心を開放し、非日常的な体験ができる華やきのようなものがそこにあるようにも思えます。それと同時に、行く先々で様々な不安で敏感になることもあるでしょう。フランス語では、旅のことをトラバークというそうですが、そこには骨を折るという意味もあるそうです。実際私は高校生の時、学校のスキー教室に出かけ、3泊4日のはじめの日に骨折をし、後の3日間ロッジで横になって過ごして帰ってきました。よいことばかりではありません。学生の頃、はじめて海外に出かけたところ、イカサマにあって5万円損したことがありました。この夏、海や山へあるいは被災地へ、あるいは外国へ行かれる方々もあるでしょうが、気をつけてくださいね。

旅をするということでは、ジブシーの人たち、この人たちは、音楽を演奏しながら旅を続ける人たちで、これはどうもエジプトから来た人という誤解のもとにつけられた表現ですが、正しくはシンティ・ロマ族という言い方をした方がよいと思います。彼らはインドの山岳地帯の舞踊をつかさどる人びとで、ヨーロッパに流れてきたといえます。ユダヤ人たちもまた近隣の人たちからは、ヘブル人、ヘブライ人と呼ばれていました。これは漂流する者たちという意味でつけられたあだ名です。英語で言うどリフターズですね。

巡礼

今日はそんな旅に関係する、それも巡礼の旅に関係する聖書の詩、詩編121編を読んいただきました。この詩は、これも京都ならぬエルサレムへ「都に上る歌」と書かれています。イスラエルのエルサレムに上るときの歌。「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る 天地を造られた主のもとから」。これは一言で言うならば、都に巡礼の旅をする者の旅路の無事を祈って歌っている歌と言えましょう。

山々を見上げて、はるかかなたにある都エルサレムに思いを寄せている巡礼の旅人の姿がここにあります。山とは古今東西を問わずとも、何かそこに崇高なもの、聖なるイメージを漂わせてそそり立つといった存在といえましょう。山は古代より原始より変らぬ形を保ち続け、人間を変えず見下ろし続けるものであるがゆえに、そこに多くの人びとが永遠につながるものを感じ続けてきたのでありましょう。そこまで言わなくても、人の生まれ育った原風景に大きな影響を残していることと思います。京都に生まれ育った方々にとって、比叡山をはじめとして、東山、北山といった山々は、京都の風景の原点になっているのではないのでしょうか。

パリン現象

『知の旅への誘い』（中村雄二郎・山口昌男著 岩波書店 1981年）という本を読んでもいましたら、ある女性の人類学者のバリ島での興味深い体験がのっていました。彼女は7歳のバリ島の男の子に民族舞踊を習わせるために、お師匠さんの住む遠い村に彼を車で送り届けたということです。ところが、その間車に乗せていったがために、その子は方向感覚を失ってしまったのです。バリ島では踊りを教えるとき、右へ左へというのではなく、東へ西へという言い方をするものですから、方向感覚を失うと踊れなくなるのです。彼は車に乗っている間に、その方向感覚を失い、調子を崩しておけいこがうまくいなくなって、しまいには、不安で食事もとれず、眠ることもできないほどの目眩（めまい）に陥ったといえます。そこで彼女が見晴しのよくきく野原に連れ出して、北にそびえる霊峰アグン山を見せたところ、たちどころにパリン現象、目眩が治り、けいこがすずんだといえます。山というのは、本来それに親しんでいる人には崇高なもの、また心に安定、平安を与えるものなのでしょう。

山のはるかかなたから

しかし、この詩人は、そのような山を仰ぎつつも、そのはるかかなたに思いを寄せ、それを越えて頼るべきものを悟っているかのように、「わたしの助けは来る 天地を造られた主のもとから」と歌っているのです。イスラエルの神は、出エジプト、バビロン捕囚といった歴史を通してこの世界に働きかけてくれましたが、ここではむしろ天地創造を行われた、その神のもとから本当の助けは来ると歌っているのです。

さて、この詩がいつ頃書かれたか、イスラエルの人びとが当時の大国、バビロニアに強制連行され捕虜となっていたそのことをバビロン捕囚と言いますが、それ以前であるか、以後かということも定かではありません。また、その内容についても、ある人は巡礼の旅を終えて帰郷するときに歌った巡礼者と祭司の対話方式と言い、また、ある人は自分の家から旅立っていく息子に父親が語っていると解釈しています。いずれにしても、旅路の道中の安全を祈っている歌と考えられるでしょう。

あなたを覆う陰

5節からのところを読みますと、「主はあなたを見守る方 あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。昼、太陽はあなたを撃つことがなく 夜、月もあなたを撃つことがない」。太陽が人を撃つというのは、灼熱の砂漠、荒れ野を旅する者を撃つ、いわゆる熱射病のことです。最近ではよく熱中症と日本では言いますが、もっとひどいものでしょうか。容赦なく照りつける気温50度にも達するかのような日射しをさえぎる影となって、日傘のように、主なる神があなたのことを息子のことを覆ってくださいのだと歌っているのです。母鳥がその翼でもって外敵からかわいいヒナを守るようにして巡礼するわが子を覆ってくださいのだと言うのです。

それでは「夜、月もあなたを撃つことがない」というのはどういうことでしょうか。月があなたを撃つとは、月射病であると言います。人のリズムを狂わせ、夢遊病やてんかんを引き起こすのが、昔は月のせいであると考えられていたようです。ピランデルロという作家の書いた短編集から描かれた『カオス・シチリア物語』というオムニバス形式の映画を見たことがあります。そのなかに『月の病』という話がありまして、満月の夜になると狼男のように夫が狂い始め、庭の木によじ登っては奇声を発するので、満月の夜になるといつも妻が夫を戸外に出すという話でした。実は、その男の人は、赤ちゃんのときに畑に寝かされていて、池に映る満月の光に魅入られたためであるという伝奇ものでした。この詩編は、そんな熱射病や月射病から子どもが体の安全と心の健康を守られるように、神の加護を歌ったのです。

見守る

7―8節では「主がすべての災いを遠ざけて あなたを見守り あなたの魂を見守ってくださいように。あなたの出で立つのも帰るのも」と記されています。「出で立つのも帰るのも」とは、巡礼の旅に出発し、巡礼の旅から無事に帰るのももちろんのこと、毎日の生活において家を出て帰る、その一切をも示しています。

この詩編で注目すべきことは、ここで「見守る」という言葉が、6回も使われていることです。

3節では「まどろむことなく 見守ってくださいように。」
4節では「見よ、イスラエルを見守る方は」
5節では「主はあなたを見守る方」
7節「あなたを見守り あなたの魂を見守ってくださいように。」
8節「あなたの出で立つのも帰るのも 主が見守ってくださいように。」
という具合に、「見守る」が6回も使われているのに気づかれます。

見守るは愛する

原語では「シャーマル」と言いますが、語源をみていきますと、「目を注ぐ」の他に「愛する」という意味があります。見守るということのその心は愛すること。愛するとは見守ること。であるならば、これは親が子どもを田舎から遠く大都会のエルサレムに送り出すときの祝福の祈りでもあるのです。これから人生の旅路で、どんな危険や誘惑に襲われるかもしれない。その愛しのわが子を自らの手から神の御手へと託して守っていただく歌なのであります。「かわいい子には旅をさせよ」と言いますが、わが子が遠い外国に旅立つ、あるいは自分の子どもが目の届かないところで危険な挑戦をする、といったときの親の気持ちは、子どものいない私などには察することはできませんが、自分の手から離れたら、あとできることは、祈ることだけではないでしょうか。

ある年輩の方がこんなことを言っていました。「年寄りには植物に水をやりすぎて、根を腐らせてしまう」私などは、観葉植物のようなものにも、水をやるのを忘れて枯らしてしまったことも、たびたびありました。私は猫くらいしか育てたことがないので、偉そうなことは言えませんが、かわいいからと言って甘やかし過ぎては過保護になり、自立は削がれるでしょうし、その逆にあまりほったらかしにされたら、ひねくれてしまうということもあるでしょう。その頃合いが問題なのでしょうが、本当に愛してくださいの方がわが子に見えない形で、いつもついていてくださる。そう確信して、送り出しているのです。

グッドバイ

「さようなら」という意味の英語の“Good bye”とは、もともとは“God by”神があなたのそばにいつもいてくださるようという意味であることを聞いたことがあります。本当にわが子を愛していてくださる方がわが子に見えない形でいつもついていてくださる。そう確信してこの詩人は送り出しているのです。言葉を換えて言うならば、“God bless you!”「神の加護がありますように」、ということですね。

眠らない神

ここで「見守る」ということをさらに具体的に言いますと、4節にあるように、「イスラエルを見守る方は、まどろむことなく、眠ることもない」お方だということです。カナン地方には植物神、植物をつかさどる神というのがあって、沃地を潤し、植物を生えさせる神という考え方があって、この神は冬には冬眠して死ぬと考えられていたようです。けれども、ヤハウェの神は、眠ったりはしない。まどろむことさえしない神だということです。

慣れない外国暮らしのときに、アメリカではじめて出産をし、長男を授かったお母さんの話を聞いたことがあります。この人は自分の子が目のなかに入れても痛くなかったそうです。赤ちゃんのときにはその顔の表情からしぐさの一つひとつに至るまで嬉しくてたまらず、この子のことを朝まで一睡もせずにズーッと見ていようと決めたそうです。ところが、明け方には眠ってしまい、朝になって起きたとき、ふとこの詩編の121編を思い出したそうです。私は眠ってしまったけれども、神様は一睡もせず、まどろむことなく、私たちを見守っていてくださるお方なのかと。そのとき、神の愛の深さを改めて思い知らされたと言っておられました。親の想いは、山々のように高いかもしれません。しかし、神という方は、山々を超えて、いつも見守っていてくださる方です。ゲツセマネの園で弟子たちが眠りこけているそばで、自らの苦い杯を受け入れようと、夜を徹して祈っておられたイエスのように。

わたしたちの生きているこの現代社会は、天変地異、戦争、信じ難い事件をはじめ、様々な問題を抱えています。これもまたバリン現象などと思わされることがあります。そのような時代に、私たちは目を上げてはるかな方を仰いでいくときに、眠ることなく、いつも見守ってくださる方が足下を照らして下さって歩むことができるでしょう。すべての苦しみをなめつくされた主が共にいますことを憶えて歩んでいきたいと願っています。

2011年7月6日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録